

第一節 彷徨

メイリア・トヒユナ少尉は、うつらうつらしていたリクライニング・チェアの上で我に返った。

軽いため息をつく。冷たい汗で額に張りついた水晶色の前髪を不愉快そうにかき分ける。連邦圏辺境、ユアロフレスタ泊地。その連邦空軍病院。

「ネレイド提督の様子はどう？」

メイリアは医療コンピュータに問う。いつもは綺麗に澄み切った濃紺の瞳が、生気を失って濁って見えた。

「ネレイド少将は昏睡中です、ジュリア・レフテナー少尉。」

「昏睡中……？」

「昏睡中です」

メイリアはかぶりを振り、テーブルに両の肘をついて、組み合わせた両手に広い額を委ねた。

“第一次ターミア辺境宙域会戦”直後、レーフラムが旗艦艦橋で倒れ、人事不省となつてから既に一か月余り。宇宙飛行士アストロパイロット症候群に伴う全身衰弱。

長期間にわたって安定した大地に降り立たなかった宇宙飛行士特有の恐るべき疾病がレーフラムを蝕み始めていることを、メイリアは一五歳の日にすでに見取っていた。彼女以外の誰もそれ

に気づかず、レーフラムは病身をおして戦場に立ち続けた。結果として、彼は倒れ、今も生死の境をさまよい続けている。

「我が守護の神よ、我がメルティアの神々よ、我が祈りを聞き届け参らせ給え……」

細い両の手を組んで、メイリアは小さく祈りの言葉を唱える。

“一切の宗教を滅ぼしてしまつた”と言われる連邦圏の中、メイリアの生まれ育つたメルティア・スルフェイク侯爵家にだけは幾つかの古い祈りの言葉が伝えられていた。

声は不意に降つてきた。

「恐縮ですね……兄のためにそんなにまでして頂いて」

「……！」

弾かれたように振り返り、自分よりも頭一つ以上も高い位置にある相手の顔を見上げた。真剣な碧い目とどこか禍々しい光を帯びたブラック・グリーンの瞳とが正面からぶつかりあつた。

「わたしの……任務ですから」

メイリアの声はいくぶん擦れていた。レーフラムによく似てはいるが、この少年をどうしても好きになれなかった。狼は、いくらか美しくても狼に違いない。災いに満ちた、銀色のオーラを纏つた剽悍な若い狼。

「兄に代わつて心からのお礼を……」

レーフル・ファウルス・ネレイドは冷笑と侮蔑、それに僅かな感嘆とをカクテルした表情を、引き締まつた端正な顔に浮かべる。空母『デラスター』号の空軍中尉、一七歳にして“第二艦隊の撃墜王”。

「兄の考えがよく分かりませんが、トヒユナ、いやリアー少尉」

許可を求めるでもなく、手近にある椅子を引き寄せて、均斉のとれた長身をしなやかに沈める。病室といっても、人の入れる余地は広くはない。猛獣と同室したような威圧感が、メイリアの柔らかな頬の線を強ばらせた。

「怖いですか、僕が？」

「え……？いいえ、そんな……」

「隠さなくてもいいです」

あなただけではない、とレーフル・ファウルスと言う。乾いた口調で続けた。あなただけではないが、みんなそうだというわけでもない。

「兄は、僕を可愛がってくれた。少なくとも、士官学校に入るまでは。今は違うらしい。兄には分かるらしい、僕が殺人者であるということが。あなたもそうなんでしょう？」

「……？」

そんなことはありません、と言おうとして、その言葉が唇を離れない。微笑しようにも、強ばった頬は意思の制御を受け付けなかった。

「兄があなたを守ろうとして必死になるのは分かるような気がする。肯定はできない。たった一人の女性を守り切るために、兄は他人の望んで及び得ない権利を放棄しようと考えするのだから」

「権利……？」

「そう、権利。兄以外の者にとっては咽喉から手が出るほど欲しくてたまらない権利。この僕を含めて」

「それは……？ わたしが、トゥリユー……いいえ、ネレイド少

将の当然の権利を放棄させているとおっしゃるの？」

「トゥリユーね」とレーフル・ファウルスは呟いたようだった。

「別に修辞学^{レトリック}で遊ぼうというわけじゃない」

連邦全土をすら賭けのチップにすることを許された軍人としての巨大な能力と、それにふさわしい権限……彼は無表情に指摘する。能力あつて権限なき者、あるいは権限あつて能力なき者が大多数を占める中で、兄はその双方を身につけている。

「二二歳で少将まで上る人など滅多にはいないわ」

「地位じゃない。地位じゃないんだ。高級軍人がみんな戦争ができる？ そんなものは錯覚だ」

辛辣に笑い捨てる。

メイリアは鳥肌だっている自分に気がついた。まるで知らず、触れることもかなわぬような領域の何者か。レーフル・ファウルスという少年の姿を借りて、話しかけてくるような気がした。妄想かもしれないが、たぶんそうだったのだから、否定できなかった。

「その力を行使する権利を放棄している。あなたゆえに」

「そ……んな」

反論の声はひどく擦れて押し出すのに大変な努力を必要とした。

「あなたは、あなたのお兄さまに人殺しをしろ、と……」

「違っ！」

否定の声は鋭く、鞭の鋭さを帯びていた。

「人殺しなものか。僕には兄のような力がないのかもしれない。あなたは僕を嫌っている。僕が怖い？ 怖いでしょう。人を殺した。

これまでに五五機の艦載機を撃墜した。五隻以上を沈めた。たしかに殺した、一〇〇〇人以上は……しかし、兄は……」

「やめて！やめて！」

メイリアは両手で耳を押える。

「そんな話、聞きたくありません！」

「兄は丸一年以上、連邦空軍の作戦を指導してきている」

メイリアの叫び声を、レーフル・ファウルスは無視した。

「戦死者だけでも数百万を超えている。アルヴェスタとヘルムで楽に四〇〇万人……兄はメルティアとの戦いも指導し、コーラルとも戦っている……でも、あなたは兄を怖くない、という。メルティアの兵士を一方的に虐殺した、そう、虐殺したんだ。その兄を、あなたは怖くないと言う」

「あの人が人殺しではないからです！あの人は、人を殺すことの恐ろしさを知っています。あなたのような……」

メイリアは言葉に詰まる。

薄い、笑いとも呼べない笑いを唇の端に浮かべたレーフル・ファウルスはあっさりと言いつ切る。

「殺人鬼とは人が違う、とね」

「そんな！」

「その通り、兄は殺人鬼ではない。兄は、人の生命をチップにすることを許されたぐいまれな人間の一人だから。彼の殺人は殺人ではない。彼の権利であり、義務である……」

「違う、違うわ、絶対に違う！」

碧い眸を、口惜しさ恐怖と、そして怒りのないまぜになった涙

を一杯にして抗議しても、白大理石の彫像を思わせるレーフル・ファウルスの表情は毛筋ほども動かなかった。

「どう違う？人殺しの恐ろしさを知っていれば、それは殺人ではない？涙を流しながらの殺人は殺人ではない？敵兵を百万人殺しても、いやいや作戦を立てたのならそれは殺人ではない？言えるものなら、戦死者の家族の前でそう言ってみるがいい。私はあなたの息子を死なせました。でも許して下さい。私は気が進まなかったのです、とでも？」

「出て行って！」

メイリアは叫んでいた。

「出て行って下さい、ここはあなたの来る所じゃありません！」

レーフル・ファウルスは束の間の沈黙に陥り、不意に立ち上がった。幅のある長身が、更に幅を広げるような錯覚に陥り、メイリアは恐怖にかられた。砕けそうになる両膝にありたけの気力を注ぎ込み、凍てついた炎のような金色の閃きを帯びた“銀狼”の凝視に耐える。

「議論しても始まらない。一年もしないうちに結論が出る」

「……？」

「戦争は終わらない。兄もそうは思っていない」

「休戦交渉が始まりました」

メイリアは反論する。

アリスティア・ヒューレル中将麾下の連邦空軍艦隊が散々な敗北を喫した“ターミア辺境宙域の会戦”からわずか二日後の連邦暦五七一年六月一三日。連邦空軍は六ヶ月にわたった“リュウインの滞陣”での敗北を認め、ヴィルワ恒星系最外縁惑星ヘルム宙

域奪回のための一切の軍事行動を停止した。

約一ヶ月後の七月二二日、頑強に戦闘継続を主張し続けていた連邦大統領カーリッツ・レークシーも、空軍相ドウルニトウ・ラーム元帥の意見具申をついに受け入れる。

ラームは主張していた。これ以上、ヘルム宙域に固執すれば、連邦圏中央部で叛乱を起こしたカルシュ・コーラルの勢力が強大化する一方である、と。

「建造途中で叛乱軍に奪取された第一次建艦補充計画艦は一ヶ月ごとに、二〇〇隻から三〇〇隻のペースで進宙を続けているのですぞ。ものの一〇ヶ月で、奪われた二万近い艦艇すべてがカルシュ・コーラルの艦隊に加わるのです。連邦空軍の制式艦隊をすべて併せても五万に届かないことをお忘れくださいますな」

連邦政府が、正式に講和交渉に応じる旨を回答したのが八月に入っただけ。ほんの数日前のことだった。両国の外交代表が々々テーパーを囲むまでにまだ一、二ヶ月はかかるだろうが……

「時間稼ぎでしかない」

レーフルはびしゃりと言った。

「お姫さまは気楽だな。政略、戦術なんてそんなものです。メルティア政府、いやスルフエイク侯爵でさえ、政略となると辛辣そのものです。気づいていなかったのですか？」

「兄が、兄が何をしたと？」

「何のために、あなたの前の称号を復活させたと思います。別にあなたの名誉回復を望んだわけじゃない。万一にも、ナイザル・ネレイドの影響力がスルフエイク侯爵家に及ばないように、予防線を張ったんだ」

この時期にメイリアの立場ひどく難しくしたのは、当のメルティア政府がこの時期に取った処置だった。

「第二次メルティア紛争」に際してメイリアがメルティア政府に剥脱された『メルティア女王』の称号を改めてメイリアに返還すると発表したのである。連邦暦五七一年五月二〇日、ル・ヨントのマーク元帥からの休戦申し入れがあった直後のことだった。

これで、メイリアのフル・ネームはメイリア・トヒユナからメイリア・トヒユナ・リアーへと戻ることになったのだが、一見名誉回復と見られるこの措置も、メイリア自身から、あるいは連邦政府から見れば納得しがたいものだった。

メイリア自身は、この後もトヒユナ姓を名乗り続けた。一方で公式記録が、「メイリア・リアー」を使うものと「メイリア・トヒユナ」で彼女を呼ぶものとに二分され、後世の史家にとつてのささやかな頭痛の種となる。

「どうして、そんな」

「あなたがスルフエイク侯爵令嬢であつては、侯爵にとつておもしろくない。侯爵令嬢は、ファアリア・トヒユナ……あなたの可愛い姪でなければならぬということですよ」

「まさか……そんな……」

「推測で話しているわけではありません。兄のことを想って頂けるのは、弟としては光栄の至り。でも、スルフエイク侯爵からしてみれば、妹の夫に、あのナイザル・ネレイドの長男など、それだけでも悪夢です。なら、あなたからスルフエイク侯爵の継承権を剥脱し、かたちだけでもリアー侯爵家の継承者という建前にした方がずっとよい。そう、過去四〇〇年以上にわたってメルティア

を支配したリアー王朝の後継者という形式に。最後の継承者」

頬を強かに張り飛ばされた表情で、メイリアは血の気を失った。彼女自身、プリンセス・オブ・メルティアの称号回復は迷惑だったし、不可解だった。現在のメルティア政府の事実上の首班となつているといふ兄ラルクにして何故、と納得がいかなかった。しかし、まさか……

「あなたは兄を信頼しているかもしれない。しかし、あなたにとつては実の兄上のスルフエイク侯爵ですら政略の世界ではこれだ。兄が戦略家として兄であるとき、あなたの存在は連邦空軍将兵四〇〇〇万の内四〇〇〇万分の一でしかない」

「帰ってください……」

メイリアは出口を指差す。その指先が微かに震えていた。

「これ以上、お話をしたくありません。帰ってください」

「そう、早々に引き取ることね。それ以上メイを苛めると、生きてこの病室を出るのは諦めた方がいいわ」

ふりかえり、レーフル・ファウルスは、入り口に立つ小柄な女性士官の手にレイ・ガンの銃口を見いだした。

「何のつもりですか、大尉？」

「あなたが相手では、ブラスターじゃわたしの方が悪すぎる。ハンド・キャノンか超熱線砲でも欲しいところだけど」

エミル・ノーラはブラスターの安全装置が完全に解除されていることをさりげなく示してみせた。

「僕は丸腰です」

「あなたはいるだけで凶器だわ。出ていってもらえる？あなたが

紳士(シエンツルマン) だつたら淑女(レイディ)の依頼は受けられるはずだけど」

「いきなり銃口を向ける淑女とは……」

「狼にはハンターがお似合いよ」

「銃をおさめて下さい。悪意はない。ただちに出ていく。嘘はつかない……これでいいですか」

「舌を動かすのは、実行してみせてからよ、レーフル・ファウルス・ネレイド」

「オーケイ、実行します」

きびすを返し、そしてふと呆然としているメイリアをふりかえり、銃を構えたままのエミルに視線を走らせる。

エミルの背がびくりと震え、引き金にかけた指が痙攣するようになり、動きかけ、そして止まった。

人間離れた苛烈な、危険極まりない何かしらは、端正な表情の皮膚一枚下をよぎっただけで、すぐにもとの無表情さに席を譲る。もう一度肩を竦め、レーフルは今度は振り返るうともせず、病室を大股で歩み去った。

「……！」

危険極まる猛獣と同室していたような緊張からようやく解放されたメイリアは、力尽きたように椅子にぐたりと崩れ落ちた。

「大丈夫、メイ？」

メイリアは辛うじて顔を上げた。

「え……あ、大丈夫です」

「お飲みなさい」

差しつけられた冷水の紙コップを受け取る。長距離を全速力で

駆け抜けた後のように乾ききった咽喉に、冷たいミネラル・ウォーターが快かった。

「あなたって度胸あるわね、メイ」

「え？」

「レーフル・ファウルスに面と向かって“出ていけ”って言えるなんて」

レーフル・ファウルスが士官学校予科の門をくぐったのは一歳の秋。一四歳で士官学校への編入を許され、一六歳で艦載機パイロットとして在学のまま戦場へ出る道を選ぶまで首席を通じたレーフル・ファウルスは、すでに連邦空軍士官学校の生ける伝説だった。と言って、レーフル・ファウルスの周囲の人間すべてが彼を賞賛する立場をとるわけではない。同期生の多くが、彼に不意な罵声を浴びせたことを、痛烈なまでの肉体的な苦痛とともに病床で後悔させられている。

もともと、最近ではそういう手合いも少なくなっているらしい、とエミルは言う。ブラック・グリーンの眸が、渦巻くような金色の閃きをたたえて所有者の怒気を溢れさせると、それだけで相手は居竦んでしまう。

「士官学校もだらしなない連中はっかりだわ」

「怖かったけれど……負けてはいけない。そう思ったの」

メイリアの視線が、医療情報を示すスクリーンの上をさまよっているのを見て、エミルはようやく強ばっていた表情をほぐした。

「いい知らせがある」

「え？」

「ぬか喜びさせたくなかったから言わなかったけれど、さっき確

認したらはつきりした」

あらゆるデータが、レーフラムの回復を告げている。あと一〇日もすればレーフラムは昏睡状態から醒める見込みだ。

「本当に？」

声がつわづるのをメイリアは押さえきれない。

頷き、エミルはポケットからメモリ・プレートを取り出した。

「嘘じゃないわ。だから、長官から命令を買ってきた」

「何の？」

「休暇の」

「休暇ですって？」

メイリアはあつけにとられて、エミルを見詰めた。

「そう、休暇よ。あなたは根を詰めすぎているし、ネレイド少将の容態ははっきり回復し始めている。あなたの方が身体を悪くしてしまったりしたら困る」

言い差し、エミルは青緑の目をメイリアに据えた。この年、エミル・ノーラはまだ一八歳。本来、メイリアの方が三歳ばかり年上なのだが、エミルの方が年長者の口調になることが多い。

「心配なの、あなたが。あなたが彼のことを想うのは分かる。でも、その余りに自分をどんどん追い込んでいく。そんなにしてはいけない。少し休んで、彼の傍から離れた方がいい。私に任せるのは不安？」

「……？」

「一〇日くらい、ウェルムへ出掛けて休養してくるといい……ナカースル大佐からもそう勧められている」

「エミルは、恒星系ヴェミュールのリゾート惑星の名を上げた。」

「思い詰めれば、思い詰めるほど、だんだん出口から遠ざかっていく。そして、最後には自分で自分を壊そうとまでしてしまう。彼はそんなタイプだし、あなたにも似たところがある。ここしばらくのあなたは異常だわ。ろくに寝てないし、食事も満足に摂っていない。心配なのは分かる……でも、生命にかかわるような段階はとうに過ぎたわ」

「でもウエルムへ？」

「応じた言葉には露骨な忌避があった。」

「メイリアが忌避を示した経緯を、当のエミル自身がよく知っているはずだった。」

元々は高温の炭酸ガスの大気に包まれた金星型の惑星だった。氷でできた外惑星の衛星を誘導してきて大気圏に突入させ、気温を一挙に低下させるとともに広大な大洋を作り上げて気候を安定化させるという“プロジェクト・アクエイリアス”の結果、居住可能な惑星に変貌した。赤道地帯に標高一万メートルを超える高山帯があり、山麓の高原から大河の貫流する一大熱帯雨林地帯が高級リゾート地として開発された。ちなみにウエルムの改造技術はさらに改良を受け、“プロジェクト・ギルガメッシュ”と呼ばれる、より壮大な惑星改造計画に受け継がれている。

「ユアロフレスタから数億キロ離れているだけだったから、エミルはレーフラムの療養地としてウエルムを上申したのだ。」

「回答は、有事即応性に問題があるという却下理由書。腹を立てた余りにエミルが踵でフロアを蹴飛ばし続けていたのを、メイリアはよく覚えている。」

「ネレイド少将を回復させるのに一番なのは1Gの重力、人工でない空気と水、明るい空、自然に吹いてくる風……つまり、惑星の表面に建っている病院なのに！」

「何が有事即応性よ、馬鹿馬鹿しい……彼女が続けたかったのだらう言葉をメイリアは正確に察していた。」

「でも……」

「あなたから見れば“でも”なのかもしれないけど……でもね、メイ、それが危ない。余り一途に思い詰めて、冷静さを失っている。彼はもう九割九分たすかる。あなたは余裕を失っているから、一分の危険ですら絶対絶命のように見える。それが危険」

「“王女の色香に迷って戦略指導を誤った亡国の艦隊参謀”か……」

「食欲がまるでなく、所在なげに食事をつつき回していたメイリアは弾かれたように視線を上げた。視線を巡らした先で、非番らしい数人の士官がアルコール飲料のグラスを前にしていた。」

「エミルからの休暇の勧告に、彼女はしばらく考えさせて欲しいとだけ回答していた。」

「彼らの手にしているのが、連邦で発行されている数多い報道雑誌の一つであることは間違いない。どぎつい見出しに踊る“王女”が彼女自身を指し、“亡国の艦隊参謀”がレーフラムを意味することも。」

「ユアロフレスタ泊地の士官食堂。」

「自分が疲れ切っていることを、メイリアとて自覚しないではな

かった。

報道の名を借りて行われる、怒濤のようなレーフラムへの、ひいてはメイリアへの非難中傷は、決して強靱とはい切れない彼女の神経を掻きむしってやまなかつたのだ。

ル・ラントと連邦との間に擬似的な平和が訪れたこの時期、連邦のジャーナリズムの多くがレーフラム・ネレイドへの猛烈な非難キャンペーンを繰り広げた背景には、“コーラルの謀将”の手元から流れだす豊富な資金の力があつた。マールクから提供された豊富な資金を、シャゴール・グリューガーは無駄には遣わなかつたのだ。

グリューガーは言っている。

「ありがたいことに、連邦では言論の自由を保障している。言論の自由とは、自分がのべた意見のゆえに罰せられることのない制度と同時に、自分の意見を金で売り渡すことを罰せられないシステムをも意味する」

グリューガーの巧妙さは、ル・ラントをも“信頼に値しない交渉相手”としてキャンペーンの対象にしたことだろう。“ル・ラントなどと結ぶより、コーラルと結べ”などとキャンペーンさせようとしないうちにも、彼の勘のよさがあつた。いかな金で意見を見る連邦の商業ジャーナリズムといえども、連邦市民の暗黙の価値観に逆らうことはできない。暗黙の価値観、すなわち“カルシュ・イコール・悪役”のイメージである。グリューガーのつた戦略は、ル・ラントに対して連邦市民の抱く負のイメージを増幅して、コーラルに対するそれを覆い隠してしまおうというもの、それは半ば以上成功していた。

「マールクは我々をよく遇してくれたし、今次の独立のための資

金、軍事的な側面協力を提供してくれた。しかし、それは、彼の都合によるものだ。我々は、我々の論理で動く。我々は、マールクの提供してくれた援助をコーラル独立のために利用するだけのことだ。結果として、マールクの不利となつたとしても、我々の関知するところではない」

士官達の一人がメイリアを視界の隅に捉えたようだった。

鮮やかなほどの敬礼がメイリアを戸惑わせた。その敬礼が、彼女に対する敬意を示していることに、この時の彼女は気づかない。滅多にないことなのだが、辛うじて返した答礼に士官達が浮かべた微笑は嘲笑に見え、メイリアは胸の裡に苦い屈辱が広がるのを感じてふつと視線を背けた。

「馬鹿みたいに一人で熱くなって暴走するのが一番危険だ」

「……え？」

びっくりして上げた視線の先で、深い琥珀色の目がやりと微笑って見せた。

「士官学校出たての連中がよくそう言う状態に陥る。ちよつと余裕を見てやり直せば済むのを、とにかく今の苦しさから逃げようとして、既定の路線を突っ走るうってするわけだな、これが。失敗するって分かっているワープだとか、航路計画だとか、まあ実験だとかを強行してだな……」

両手を打ち合せ、ナカースルは“ぴしゃっ”と音を真似してみせる。

「メイとは、ちよいと立場は違つがね」

「大佐……」

「エイミイが言つた。メイの目が据わつちまつてるってな」

琥珀色の視線をしばらくメイリアの表情に注ぎ込んでから、ナカースルはため息をついたようだった。

「やつれたな、随分……正直言って、こんなお姫さまがやれるもんかと思っただけだ」

「え……ええ。わたしにも、やれるかどうか、わかりませんでしたが。でも、やらなければならぬ……それはもつと分かっていました」

「見事にやり抜いた……そう思わないか、メイ」

「え、ええ」

「余り言いたくはないんだが……メイ、君は今、とても難しい立場にいる。それも含めてゆっくり考える時間をとることだ。『シグナ・フォース』号を降りることも含めてだ」

拡張に拡張を続ける連邦空軍の中で、密かに募りつつある反感といらだち、そして不満が、はげ口を求めている。もともと軍人でもないメイリアが旗艦に乗り組んでいることに対する単純な反感。コーラルの叛乱に適切に対処できない連邦空軍に対する苛立ち。ル・ラントのマルクに戦略上の先手を取られ放しになっている状況への不満。

連邦空軍国防情報局の手になる“レンディッツ・レポート”は、繰り返す。“メイリア・トヒユナには、最早利用価値はない”と。ひとり空軍相ドルニトウ・ラーム元帥のみが“実戦部隊の総意”としてメイリアの解任に反対していた。レークシー大統領が、“実戦部隊の意向は無視し得ない”としてラームを支持したが、さもなければラーム自身が解任されていただろう。

「降りません、絶対に降りません。どんなことがあっても、それ

だけは！」

メイリアにしては激しすぎるほどの口調がナカースルを驚かせた。何かあったのか……と。

「待てよ、メイ。まだ結論を出すには早すぎる……とりあえず、ウエルムで八日間だ。本当なら一ヶ月以上の賜暇が当然なんだが、レフィのやつは一〇日もすれば目を覚ますそうだ。目を覚ましてメイがいないと寂しがるだろう」

こくと顎を引いたのが返事だったが、メイリアの表情は明らかに緩んでいた。

「ウエルムはちよつと兵隊には楽しめない所もあるが、メイにはちよつどいいと思う」

「……」

さっきの士官達が、“大佐、プリンス・メイを独り占めはするいですよ”と声をかけてくる。また、ちよつとびっくりしてメイリアは大きな碧い目を見開く。

「るせえ。俺はメイに悪い虫が付かねえように見張ってるんだ。虫どもはさつさと退散しな」

「上官横暴！」

非難の声は、しかし、今度はメイリアに思い違いを悟らせるに十分な親しみを帯びた暖かみを伝えていた。

無視し、ナカースルは視線を戻した。

「軍人らしい顔つきになったってのは、言い換えりやひでえご面相してるってことだぜ、メイ。ゆっくり休んで美人さんぶりを上げてからあいつを出迎えてやってくれないか」

「……はい」

メイリアはナカースルの忠告を容れた。

泊地の宇宙港は混み合っている。一時の休戦が成立しかけていても、連邦空軍はその活動を停止させてはいない。慣熟航行を終えた新造艦艇は、やはり訓練を終えたばかりの新兵を載せて最前線の泊地へ入港してくる。

一方、“ヘルムの会戦”から“リュウインの滞陣”を戦いぬいた熟練兵たちは、一時金と賜暇を得て休養地へ向かう。純粹に休養を求める者はウエルムのリゾートへ、やや猥雑な楽しみを欲する者はラタウ恒星区首都のゼムリアへの便を待っていた。中央部に腰を据えるカルシュ・コラルという一大叛乱勢力が連邦圏の交通路を攪乱していたから、帰郷して家族に再会できる者は多くはない。

レーフル・ファウルスは、決して上機嫌ではない自分を自覚している。

疲れ切ってひどくやつれて見えたメイリアの目は、もつと昏くあつてもよかった。彼女の眸は明るすぎた。レーフル・ファウルスは悟っている。明るさをもたらしていたのが、兄の傍らにあるという事実だった。悟ったこと、そして悟った内容が、メイリアを追いつめてみたいという衝動につながった……のかもしれない。そう思い、ファウルスはやや愕然とする。

……後悔しているのか？

嘘を言ったつもりはない。レーフル・ファウルス自身が欲して得られないすべてをすでに手にしているレーフラムが、当然行使

すべき権利を留保し続けていることが苛立たしかった。だが、それだけではない。

……いずれにしても休戦など続かない。

連邦は戦争を止めるつもりはない。経済は、史上最初の恒星系間戦争という一大イベントのもたらす巨大な経済効果にわき返っている。イベント……連邦の経済組織から見れば、戦争は膨大な需要を生み出すイベントと変わらない。数百万の戦死傷者でさえ、彼らや彼らの遺族に支払われる弔慰金と年金が新たな消費支出として密かな議論の対象となつてさえいるという。

そして、ナイザル・ネレイドを初めとする連邦政府の主流派。ナイザルはともかく、戦争を始めたのは彼らであり、戦争を敗北のままに許容するわけにはいかないはずだ。

“ゼムリア行き恒星間連絡船——便ゲートに接続完了。便乗者は第一四番ゲートへ。繰り返す……”

アナウンスがファウルスを我に返らせる。帰還率の低い艦載機パイロットは、帰郷のための便を優先的に割り当てられる。もつとも、初め、帰郷する意思はなかったから、ウエルム行きの便を予約していたファウルスだった。

気を変えたのは、父ナイザル・ネレイドの名で送られてきた一周の書簡だった。

『メルティア政府は、レーフル・ファウルス・ネレイド連邦空軍中尉に対して、スルフェイク侯爵令嬢ミス・ファアリア・トヒユナとの面会を許可。五七年八月一日より二五日の間に、二日以上前に本人より期日を申請されたし』

無論、ファウルス自身は、書類の意味する内容が自分に帰郷を

選択させたとは、意識的にも無意識的にも思っではないなかったのだが。

「あれはネレイド少将じゃないのか、ハイドリヒ？」

「似ているが違う」

レーフル・ファウルスと入れ違うように待合室に入ってきた二人の士官が、ちょっと驚いたように視線を交差させた。一人は薄い色の金髪を短く刈り込んだ偉丈夫。もう一人の柔和な表情の青年は、黒い髪が既に頭頂近くまで後退を完了している。

それは、二年後にその二人が同じ人物を指して交わすことになる会話と全く同じだった。

「弟の方だ。レーフル・ファウルス・ネレイド……大尉だったかな？第二艦隊で艦載機パイロットをしていると聞いた」

「初めて見た」

「瓜二つだと言っている連中が多い。どう思う、シー・ファン？」

「確かに似ているね」

飲み物を買ってこよう……黒髪の士官は自販機にカードを滑らせて、吸い飲み用のボールを二つ取り出す。待合室には人工重力がかかけられていない。

放り投げられたボールを、金髪の士官は器用に受け止めた。

「確かに似ている。でも、第一印象だけだよ」

「第一印象だけ……か？」

「私の故郷に竜ドラゴンと呼ばれている伝説の動物がいてね」

「うん？」

金髪の士官は吸い飲みの封を切る。

「レーフラム・ネレイド少将は、その竜ドラゴンだと言いたいのか？」

「穏やかな眠れる竜だけれど、ひとたび目覚めれば風を呼んで天へ舞い上がる。一方、弟の方は……」

「銀色の狼……か」

「そう。狼、特に銀色の種族はね、私の故郷では地表では最も高貴な動物として敬われている」

「その比喩は面白いな。竜は天を翔ける力がありながら目を閉ざして安らぎを求め、狼は天を望み、天を翔けることを欲しながらも、その足は地表を蹴るのみ」

「たとえてものね、ハイドリヒ。諸刃の剣だとも言えるね」

シー・ファンと呼ばれた士官は掌で吸い飲みのボールをくるくると遊びながら、穏やかな表情を変えなかった。

「たとえは直感的な理解を助ける。でも、たとえそのものが間違っていれば、真実への距離をかえって開いてしまつ結果になる。そしてね、比喩の矢が真実の正鵠を射抜くか否かは、射手の力量しだいだということだよ」

「リン・シー・ファン中佐の射手としての力量は必要にして十分なものと理解しているんだが」

ハイドリヒは吸い飲みのボールを口元に運んだ。

「誉めてくれてありがとう。だから、忠告するだけだけれどね、ハイドリヒ」

「うん？」

「熱いよ、それ」

「うん……うあつ！」

一口吸い込んだボールの中身を、ハイドリヒは危うく吐き出しかけ、辛うじて咽喉の奥に押し込んだ。火傷しそうな熱さが濃厚な甘味を伴って食道から胃に下っていく間、ハイドリヒ・ネーベルシュタット中佐は胸を押さえてあえぎ続ける羽目になった。

「シ、シー・ファン！言ったはずだぞ！」

「うん、聞いたと思う。だけど、毛嫌いしては味覚の新しい地平は開かれなと思うんだが、どんなものだろう？」

「中身を確かめなかった俺も不覚だった……」

ネーベルシュタットは親友の面上を、剣呑な鋼蒼色の視線で斬りつける。

「他のものならともかく、汁粉の吸い飲みだけはやめてくれと何度も言っているじゃないか！」

「なるほど、それできみが共和国側の全権大使と言っわけか」

瘦身に不釣り合いなほど立派な口髭をたくわえた小男を前にして、マールクはうんざりした口調になっている。

「いいえ、全権大使ではありません、閣下」

小男、共和国外務次官補の一人、カシニー・ローゼンは、こちらに興味深そうな視線で“ル・ヨントの常勝提督”を観察している。

「……？」

「誰も来たがらないのです」

ローゼンは、見事な口髭をもっともらしく捻ってみせる。

「だから、小職が来ました、自薦です」

「自薦、ね？」

まさかね、という表情で、マールクはしかし言葉の上だけはそれらしくねぎらった。マールクから前線将兵から見れば、外務官僚は共和国政府の主流を絞める高級官吏である。しかも、外務次官補は外務大臣と外務次官に次ぐナンバー3にもなり得る立場である。そんなエリート中のエリートが、危険な最前線へ自薦してきたなどと言われても、はいそうですかと信じられないのがマールクの本音だった。無論、マールクの聡明さは、それが随分偏見と独断に満ちた判断であることを認識してはいるが。

「あなたにとりいるためにきました。それが本音です」

ローゼンは意表をついてきた。

「わたしに、ね？」

「そう、マールク提督、あなたにね。小職は毛並みが悪い。官僚としては、ここまで来るのがやっとだし、それにもう共和国に大して期待するところがないんです」

「それはまた……」

マールクよりも先に、副官のクリース・ロークが反応した。

クリースはさり気なく上着のポケットに右手を滑り込ませ、指示を求めて上官の濃い灰色の瞳を凝視する。が、マールクがローゼンの意外の態度に驚いたとしても、それは一瞬でしかなかった。

「どうしてまた？わたしは祖国を愛しているし、それに大いに期待もしているよ。」

「真実を語っておられるとすれば、元帥閣下、あなたはまるきりあまちゃんか、それとも天性のベテラン師でしょうな。」

ローゼンは遠慮がない。

「はつきり言って、小職は役人でいても余りこの先が望めないのですよ。ただ、毛並みが悪いということ以上。」

ローゼンが続けて口にした言葉を、マールクは三分の一も理解できなかったが、その意味するところに気づかぬほどに鈍くはない。

「『連邦公用語』？」

「よくお分かりですな。」

「かなり上手いようだね。どこで？」

「連邦母屋で。二年弱、おりました。毛並みの悪い、たたき上げの木っ端役人としては、外国がドレドだけではなくなつたという劇的なパラダイム・シフトにのつかるしか、この先浮かび上がるチャンスはないと考えたんですよ。それが、かえって自分の首を絞めることになるなんて思いもせず。」

「……了解したよ、ローゼン次官補。」

「『連邦公用語』を専門に分析する部門の創設は、政府の『敵性語を学ぶ必要などなし』という意見によつて却下され続けてきている。それでもマールクは数十人の規模での『言語班』を作り、『連邦公用語』を理解し、操ることのできる士官を開戦前から養成してきていた。」

戦っている当の相手の情報を軽視するという傾向は、『ドレド

戦役』当時から共和国政府の病弊と言っている。戦役の時は、『ドレドに関する情報の収集と解析が首相の名で禁止されると言つ病的な状況だった。』

「これを見て欲しいんだけどね。」

マールクが放り出した書類に、ローゼンはさすがに意表を突かれた表情になる。連邦ニュース・ネットワークの伝える連邦での株式市場の動向と、共和国宇宙軍艦隊最高司令長官とを結びつける輪を簡単に見いだせるとしたら、かえって異常と誹られても反論の余地は少ない。

「外務次官補として、それから連邦との和平交渉に向かう共和国代表として、どう読む？」

「……造船と重力子工学機器系の株式が急騰しておりますな。一方で繊維産業は堅調だが余り乱高下はない……。」

へえ……というのはマールクの正直な感想だったらしい。

「そう言う風に読めるのか？」

「読めと仰つたのは、閣下でしょう。」

「私にはちんぷんかんぷんだったんだ。」

決まり悪そうに髪をかき回すのは、共和国宇宙軍最高の戦略家と言つよりも、課題を解けなかつた落第生という風情だった。

「……で、そこから導き出される君の結論は何だい、次官補殿？」

「これは試験ですか、閣下？」

「そつだよ。」

マールクはいささかも悪びれない。

「株価の動きの読み方は分からなかったけれどね。で、外交官僚としての君の読みを聞きたいんだ」

「小職の読みが、閣下の分析に合わないときはどうなさいますか？」

「合わなくたってどうってことはないよ。学校の試験問題じゃないんだ。正解や不正解があるわけじゃないし、私の考えが絶対的な正解であるはずはないだろう？考えが食い違っているからってエア・ロックから裸で放り出すようなことはしないよ」

「マルクは悪戯っ子のように微笑って首を振って見せる。

「聞かせてくれないか。私は、立場の違う、プロフェッショナルの意見を聞かせて貰いたいと思ってる」

人の良さそうなのにやにや笑いを浮かべた表情は、一二〇〇万人にも及ぶ共和国宇宙軍艦隊将兵を叱咤する“不敗の名将”のイメージとはほど遠い。連邦公用語を進んで学ぼうとするくらいだから、ローゼンも自身の不羈さに自信がないとは言えない。彼の背に冷たいものを走らせたのは“プロフェッショナルの意見”という言葉だった。

「マルクは、共和国政府や宇宙軍参謀本部を“プロフェッショナル”とは認めていない。それが自薦して前線を訪れる前、ローゼンが得たマルクの観察結果だった。」

「繊維産業は平和産業の代表です。これが堅調。これは当然です。軍人も服は着ます。しかし、戦時と平時の消耗量にはそれほどの違いはない。一方で造船……と言えば、宇宙船。つまり戦闘艦艇と考えられます」

「うん……それで？」

「負けたと思っていれば、国家としての投資を平和産業中心に向け変えるでしょうから。小職が連邦母星に駐在しておったころには、国家プロジェクトとして“プロジェクト・ギルガメシュ”という惑星の気候改造計画が進められておりましたが、それもどうやら中断の様子です」

「“プロジェクト・ギルガメシュ”？」

「外惑星で氷結している水や、炭化水素系ガスを内惑星軌道へ運ぶ計画でした。氷の塊は、太陽反射鏡で大きな氷塊に変えて大気圏へ突入させます。乾燥惑星には一挙に巨大な大洋を作り上げ、炭酸ガスで温室状態になっている高温惑星に対しては一瞬で大気温度を冷却させて居住可能な惑星へ改造するというものでした。炭化水素系ガスはそのまま開発時の燃料や原料として使います」

「壮大な計画だね」

「一〇近い開発途上の恒星系で同時にプロジェクトが実施され、連邦は二〇年弱の間に新規の有人惑星を一〇数個を得るはずだった。新たに増産される食糧は数十億トン、居住可能な人口は一〇億を上回る。」

「シエルメス連邦の巨大な国力を誇示するような壮大極まりないプロジェクトだった。が、“銀河系大戦”開戦直後、“プロジェクト・ギルガメシュ”の対象となっていた筈の恒星系は無人のまま打ち捨てられている。」

「連邦がこれで戦争をやめるつもりなら、このプロジェクトを再開しないわけがない。成功すれば、シユネーゼル程度の恒星系の一つや二つを譲ったところで連邦には痛くも痒くもないはずですから。プロジェクト再開の動きがあれば、新規惑星開発、土木建築といった産業の株価がもつと上がっていく」

企業人というのはシビアなものだ。たとえ政府が公式に認めていなくても、あつと言つ間に情報をつかむ。そして情報はまっさきに市場に現れてくるのだ。

ローゼンは結論付けた。

「連邦の経済界は、政府の意図を読んでいます。場合によっては譲歩しても良いが、“負け”を認めるつもりは全くない」

いかがですか、というのが採点を求める言葉だった。

「で、我が政府の意図はどつなのかな？」

マールクの声は特に何の感情も示していない。ローゼンは肩をすくめた。

「ざつくばらんに言つて、この講和はまとまりません。ジュリコウのダルマ野郎、あ、いや、外相は講和のための償金として四〇〇兆共和国通貨を要求するように主張しました」

だるまとは、外務省内でのシュジュケイのあだ名だ、とローゼンは注釈を付ける。

「四〇〇兆ね」

マールクはさして驚かない。

「本気かね」

「ですとも。それに連邦圏の半分の宙域割譲を絶対必要条件とせよ、と訓令してきています。捕虜交換、償金、領土割譲、この三つを連邦政府に吞ませないかぎりには休戦はない……とまあ、勇ましいかぎりです。こんな条件を、連邦が吞むわけはない。自明ですから。外務次官補連中の誰も、こんな馬鹿馬鹿しい役回りを引き受けたがらない。で、小職が来たわけです」

「きみは吞ませる自信があるのか？」

「とんでもない。だから申し上げたでしょう、閣下にとりいるつもりだ、と」

「……」

「全権を委任されていたならば、なんとかしてこらんにいれましよう」

豪語は貧弱な外見にそぐわなかったが、ローゼンは気にもせず続ける。

「無論、こんな無茶苦茶な条件じゃありません。ヴィルワを中心にした半径一〇〇光年程度の宙域の割譲と、その外側二〇〇光年くらいの非武装化。捕虜の交換は無論ですが、まあ、この程度なら連邦も吞むかも知れません。償金はとれませんな。あとは付帯条件で、連邦にどれくらい譲歩させられるか、ですが……余り、無茶を言つて連邦を怒らせるのは得策じゃないでしょう。中立条約、シュネーゼル方面での連邦船籍船の無償、または有償の護衛といったところです」

「なるほど」

マールクは問う。

「その程度、と君は言つが……その条件を連邦に吞ませられるのかな」

「……せつかく、元帥と艦隊がここまで勝つてくださったんですから、この程度を吞ませられないでは給料泥棒でしょう。むしろ、問題は別にあります」

「うん」

「あのだるま野郎は全権委任状を出さなかった。うまくいけば、

全部自分の功績にするつもりだし、失敗すれば、あれは出先機関が勝手にやったことだからと弁解するつもりなんです。犠牲の小羊になるのはまっぴら御免です。だから、こうやって閣下に手内を曝け出しました。いざとなったら、閣下に救って頂けることをお願いしているわけです」

「おやおや……というのがマールクの反応だった。休戦交渉に全権大使を派遣するという外交の基本をすら無視して、保身のための小細工を優先させるシユジュケイの視野の狭さには呆れるしかないが。」

「まあ、やってくれ、ローゼン次官補。今は、時間が千金にも値するのだから」

「お任せください、恐縮」

したり顔に一礼するローゼンに、マールクは余り好意的ではない口調で応えた。

「任せるしかないのだろう、次官補」

「は……？」

「選択したんじゃないんだ。それは心得てくれないか。意味は説明しない。考えておいてくれればよい。なんにしる、よろしく頼む、ローゼン次官補」

不得要領と納得が二人三脚しているような表情で退出するローゼン次官補の背中を見やりながら、ほっとしたように肩を落としたのはマールクではなかった。

「狭い部屋で銃を抜かないでくれよ、中佐。きみの腕は知っているつもりだけど、いざ銃を抜かれるとおっかなくていけない」

クリースの瞳に、珍しくも不審と狼狽のないまぜになった表情

が揺らめいていた。慌てて敬礼して表情を消す。

「異じやないか、とてもいいええそうだね」

淡い琥珀色の目がかすかな狼狽を示して、あわただしく瞬く。

マールクは肩をすくめて髪をかき回した。

「ネイもそう言っていた。迂闊なことを言えば、あの小父さん、クローネス・マールクには叛乱の意図ありとでも、ドロク元帥閣下や我らが禿豚閣下に注進に及ぶかもしれない……とね」

反問はクリース・ローク中佐の服務規定には含まれていない。

このときも、“では、どうして？”という一言が、彼女の声帯から編み出されることはなかったから、そのあとのマールクのせりふは、いささか独白めいて宙に吸い込まれてしまった。

「好運と我らが禿豚閣下の違いを知っているかい？ 好運には前髪があるが後ろ髪はない。禿豚閣下には、そのどちらもない、ということさ。むやみにチャンス捨てていても、好運を掴むことはできないよ」

「捕虜になっているル・ヨント共和国宇宙軍将兵ですか？」

ナイザルの指示がよほど意外なものだったとしても、彼の腹心を務めている男は表情に感情を表さない訓練を既に一〇年以上にわたって自らに課していた。

ル・ヨント共和国宇宙軍の捕虜の中のある種の条件を満たした者と接触せよ……ナイザル・ネレイドが腹心のレンヴェルト・ヒュッペルにその命令を与えたのは、連邦暦五七〇年一二月。

“第二次メルティア紛争”の余燼すら収まりきっていない。史上